

郷土研通信



ノリウツギ（別名：サビタ）
アイヌ語名（屈斜路地域）
オプサ [<op（槍）-sa（前）]

発行：てしかが郷土研究会 北海道川上郡弟子屈町中央3丁目2-10
発行者：松橋 秀和

七月例会

数日前からの夏日が幾分薄らいだ七月二十四日に開催されました。出席者は、会員五名でした。

○例会議題

近況報告

・松浦武二郎記念館館長

山本命氏の講演

詳細は別紙例会のレジュメのとおりです。当会から三名が当日拝聴しました。講演後、山本館長とご挨拶をし（松橋）、機会を見つけて弟子屈にも伺いたい旨を話されていました。

今年も高瀬名誉館長が北海道に来られる予定であるとの情報があり、弟子屈に来られることがあれば、当会が主催してお話しをお聴きすることも検討したい、と提案がありました。

・前田航太さんから

阿寒摩周国立公園90周年を記念した「切手シート」が七月末に販売される。



これは、摩周湖観光協会が実施している第一三回弟子屈フォトコンテストで入賞した作品を素材としている。切手シートには、てしかが郷土研究会が町の広報紙で発表した「阿寒湖国立公園小史」（小林俊夫氏著 参照させていただいて「阿寒摩周国立公園のはじまり」の文を寄せている、とのことでした。



☆
いずれも弟子屈町に関係することが切手になることは喜ばしいです。

・小林俊夫さんから

来る九月二十七日に、阿寒横断道路の建設に尽力した永山在兼の業績を記念し、双岳台に氏の名称を冠した「永山峠」の標柱の建立式を行う、という情報があった。

☆

阿寒横断道路が完成したとき、関係者によって「永山峠」と記した標柱が建てられていたが、いつしか姿を消しその名称も地元の人びとからも忘れられていった。

シーニックバイアイエイというグループがこの地を国立公園として指定されるに至った永山在兼の多大な業績を顕彰しようと環境省や国土交通省北海道開発局と折衝して、再び「永山峠」

の名称を復活させることができるようになった、とのこと。

以前には、町内に「双岳荘」と名付けられた旧日本電信電話公社の保養所がありました。これは、日本が敗戦間際に急逝した永山在兼が家族のために遺しておいた温泉井戸のある大きな家で、敗戦後は残された永山家族が熊本県から移り住んだものです。

この保養所に「双岳荘」と名付けたのには、分野は違えど技術屋としての矜持と永山在兼への友情と畏敬の念が感じられます。



勉強会

「戦前の北海道関係映画フィルム」を視聴

「戦前の北海道関係映画フィルム」から「北海道の国立公園 後編」の「阿寒国立公園」と「北海道拓殖実習場 前編」の「釧路実習場」部分を視聴しました。

このフィルムは、一九三六（昭和一一）年秋に北海道で行われる陸軍特別大演習と地方行幸を前に北海道庁が作成した「天覧活動写真」を当時の宮内省に献上したものです。

二〇〇七（平成一九年六月）に全国植樹祭で来道された天皇陛下（現上皇陛下）から、昭和前期の北海道を撮影したフィルムが北海道に贈られたもので、北海道立文書館で経年劣化したフィルムを処理してデジタル化にし、道民に複写サービス（実費負担）しているものです。

参考までに映画本編のリストは

- 1 北海道の沿革及び都市 前編
 - 2 北海道の沿革及び都市 後編
 - 3 北海道の産業 農業篇
 - 4 北海道の産業 水産業篇
 - 5 北海道の産業 林業篇
 - 6 北海道の産業 工業及び鉱業編
 - 7 北海道の国立公園 前編
 - 8 北海道の国立公園 後編
 - 9 北海道の拓殖 前編
 - 10 北海道の拓殖 後編
 - 11 北海道拓殖実習場 前編
 - 12 北海道拓殖実習場 中編
 - 13 北海道拓殖実習場 後編
 - 14 雪中の軍事教練（北海道）
- この他に北海道立文書館で編集したこれらのダイジェスト版があります。
機会を見て全編を視聴したいと考えています。

次回の例会

令和六年八月二一日（水）
一九時から

ふなやと歴史館

・勉強会のテーマは未定

むかしむかし写真館

No.344

弟子屈公園 その2

弟子屈公園は「むかしむかし36」てしかが歴史写真館10で紹介していますが、新たな写真がでてきたので再掲します。

弟子屈公園の経緯は『弟子屈町史（昭和24年史料源蔵著）』の記述によると「大正3（1914）年に将来市街民の逍遙地という目的で、柳沼万之助が私財をなげうち、それに村民が協力して労力奉仕をして池や四阿をつくり：（略）池全体にひろがっている蓮は東北北海道唯一のもとなわわれているが、これは今泉駒造が北海道水田開拓の先覚者である札幌郡広島村島松の中川久藏と昵懇であったことから、同氏のところから送られたものをこの池に移したもので（略）、開拓者同士の友情につながる



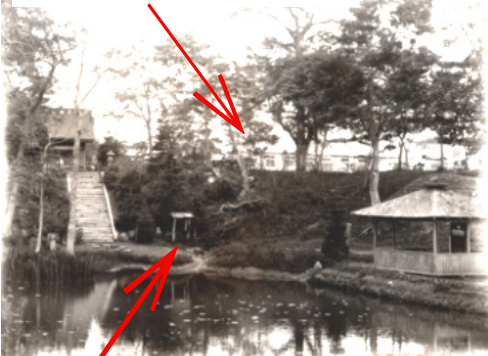
代仮名遣いに改め、適宜ルビを加えている）
また「（この池には）じくじくとぬるい水が湧いていて小さな流れをし（略）、鹿が来ては舐めていたので鹿土とアイヌは

呼んでいたところであり、仁多方面から通学する子供たちはここまで跣足で来て、足を洗って下駄を履いて学校に入ったし、夏に外で遊ぶときは必ず跣足だったので、よくこの池に足を洗いに来た」とも記述してある。同じことが史料源蔵著『北の原野の物語』の「はだし通学」のところにも同じような記述がある。

現在は当時と比べて文明は発展しているが、自分の生活だけに汲々として周りの人々を顧みることがないように思える。私財や労力奉仕を提供して地域に住む住民が少しでも楽しく生活できるように街づくりをしている風景には当時の人たちの民度の高さを感じるのであるが。



弟子屈小学校の校舎が見える



矢印の辺りからぬるい水（温泉）が流れ出ているのではないかと



上の写真の現在